

素囃子の変遷(三)

竹本幹夫

【シラバヤシ物の諸曲②】

物まねの所作の伴奏を主とする〈熊野〉など第一グループのシラバヤシに対し、今回紹介する第二グループのシラバヤシは、序之舞や神楽の序の後にシラバヤシを奏する、より舞踊性の強い構成を持っている。〈三輪〉〈杜若〉〈松風〉〈鶉羽〉の四曲が、管見に入った第二グループのシラバヤシ物のすべてである。いずれも観世座独自の特殊演出とされたらしく、とくに前2曲の舞事は、シラバヤシを本来とするとの説が古くからあった。室町末には後掲2曲のシラバヤシは滅び、〈三輪〉〈杜若〉のそれもほとんど退転しかかっていたらしい。これらの消滅の理由をさぐる事が、なぜ右4曲のみに序+シラバヤシの形態が特殊な秘伝として保持されたのかを推測する、間接的な手がかりとなるように思われる。

由良家蔵『笛秘伝書下』(天文20年奥書)に、

松風村雨の舞も白はやしにする事あり。

是も序の位にて吹出す。松風の序、吹出しても、そのまゝ、白はやしなり。……此

時ハ、二段めハ舞他。手なし。(A)

とある。〈松風〉の前の舞を〈杜若〉同様のシラバヤシにすることがあり、その場合は後の舞がハタラクではなく舞になる、と説く。一方鴻山文庫蔵『笛遊舞集』には、「舞の内、かけり吹出し、本手下無調より吹出す」云々といひ、江戸初期頃の内容である中世文芸叢書『宮増伝書・異本童舞抄』所収の笛伝書に、

松風の懸リヤウ習有。是ハイロエノ舞ト申也。昔ハいろへはかりニテ舞ニハなかりしを、中比舞ニまい初メタルト申伝リ。

序ノ吹出し、イロエニ似タリ。太夫ノふりヲ見テ舞ニなすべし。(B)

とある。ここでは、イロエに似た序の後に、イロエを舞うのが、〈松風〉の本来の演出であるという。これらをAと重ね合せ、又〈杜若〉のシラバヤシの序も原則的に「下無調」より吹出すものであった(諸書)ことを参照すると、現在のイロエガカリ中之舞の祖型が、序+シラバヤシの演出であったことになる。しかしながら、Bの説をそのまま鶉呑みにする

ことはできないようである。

現在のイロエガカリ又はそれに類する舞の多くは、そのカカリの部分の定義が古くから「音取」「かけり」「しらばやし」「序」などとされて一定していなかった。前回は指摘しなかったが、〈鶉〉の笏之舞で、舞の直前を「しら働」と呼ぶ例すらある(岩瀬文庫蔵『花笛集』)。こうした形態の舞事を持つことは、神舞や中之舞など呂中干形式の舞の祖型である古態の天女舞を舞う能であった〈鶉羽〉〈海人〉〈当麻〉などに典型的な現象であった。とくに〈松風〉と舞の形態や演出の細部に多くの共通点を持ち、シラバヤシの演出をも有する〈鶉羽〉が、世阿弥時代には天女舞の能であったと確実視されることは、〈松風〉の舞の本来の姿を考える上で決定的な意味をもとう。〈松風〉も当初から呂中干形式の舞を舞ったものであり、シラバヤシが本来と主張するらしいBの説は、〈三輪〉〈杜若〉の秘伝を援用した付会の説であったとみてよいのではなからうか。ただし、第二グループの4曲は、シラバヤシの演出をも持つという点以外はまったく共通点のない、別風体の作品である。このことから見て、〈松風〉等が〈三輪〉〈杜若〉の特殊演出を意図的に模倣したものであった可能性はほとんどないとも考えられる。つまり「序」の後にシラバヤシを奏するという普遍的な演

出形態がまず存在し、〈松風〉〈鶺鴒羽〉の舞の導入部を『序』と定義する認識が生じた後に、シラバヤシの演出がとられるにいたったといった経緯を想定できるのではあるまいか。

〈松風〉〈鶺鴒羽〉と替わめてよく似た舞事を持つものに、禪竹時代以前の能である〈熊野〉がある。その後の舞はシラバヤシのカケリとも呼ばれる短冊の段であるが、落花への詠嘆と宗盛の感動という二つの場面を合理的に連結する役割を与えられており、これをシラバヤシ的に演出することは、成立当初よりの構想であった可能性が強い。後の舞のシラバヤシの用法としては、すぐれて進んだ新形態といえよう。これに対し、〈鶺鴒羽〉〈松風〉の後の舞（〈松風〉の場合シラバヤシの名目なし）にも、シラバヤシ的な伴奏と一体の物まねの演技をなすことが古くからあった。両曲本来の演出かどうかはともかく、〈熊野〉の成立以前から存在していたものと考えてよからう。

〈松風〉の前の舞をシラバヤシにした場合、後は右のようなハタラキではなく舞を舞うことになっていた（A）。単調な伴奏の重複を避けるための故実と考えられるが、〈松風〉〈鶺鴒羽〉は前のシラバヤシよりも後の物まね的性格の強いハタラキの方に、伝書類の記述が集中する傾向がある。後の舞を物まね的なハタラキで演ずることの方が実際には多く、ため

に前の舞でのシラバヤシは次第に失われていったのではなからうか。

右の第二グループ4曲の舞事のいずれも、ワカにはさまれ、或は一セイや所作を伴わない大ノリ地に導入されるものであった。こうした小段構成を持つ舞の段には、ハタラキ的な物まねではなく、より舞踊的な演技が要求されたはずであろう。ところがシラバヤシというのは物まねの演技の伴奏であったのであり、呂中千の舞や神楽など、より高度に舞踊的な舞事を『序』の後に配する工夫がなされた時、古くは多く存在したであろう第二グループのシラバヤシは急速に消滅したのではなからうか。最初から呂中千形式の舞を舞っていた〈鶺鴒羽〉〈松風〉の前の舞のシラバヤシ化は時代の流れに逆行した異説であったとすらいってよからう。

物まね的所作の伴奏たる第一グループのシラバヤシが、名目は失われながらも働きの祖型としての演出史的意義を担ったのに対し、舞踊的な第二グループのシラバヤシが、秘伝としての名目のみ残って実体はほとんど退転してしまったあたりにも、シラバヤシの本来的な性格の一端をうかがうことができよう。

（たけもとみきお・実践女子大学講師）